

ている。次に契約企業数が多いのが米国で7社、フランス6社、日本4社、トルコ3社、英国3社と続いているが、契約量で見ると米国1800万バーレル、トルコ1702.5万バーレル、フランス1206万バーレル、英国910万バーレルで、日本はインドと同じ720万バーレルである。

さらに8月からの後半期の契約でも同様にロシアが契約件数、量ともにトップ(12件、総計3490万バーレル)で、次いで米国(7件、2430万バーレル)、トルコ(2件、1530万バーレル)、フランス(2件、1152万バーレル)となっている。

ロシア、フランスが多くの契約を獲得した理由は明確であり、これまで安保理を中心とした国際機関において積極的にイラクの国連決議遵守姿勢を評価し、経済制裁の全面解除を呼びかけてきたことがイラク政府に評価されたためである。またトルコも石油輸出ルートを握る国として、かつ密貿易相手国として重要な経済的パートナーであること、また対クルド政策上共同行動の必要性があることなどが戦略的に重視された。第二期での契約で中国が新規参入しているのも、安保理理事国としてロシア、フランスと並んで重視された結果であろう。

しかしその一方で米国企業との契約が多いことは、必ずしもイラク政府の対米敵対姿勢が米企業のボイコットにつながらないことを示している。逆に米企業を抱き込むことで、これまで経済関係の少ない米国に改めてイラクの重要性を再確認させる意図が見てとれる。後述する西クルナ油田開発におけるロシア企業とのPS契約でも、そこに参加しているLUK oil社には米Atlantic Richfield社が8%のシェアを持っており、政府が外交上対イラク強硬姿勢を取る一方で、米国企業のイラク原油へのアプローチが進められるという米国の姿勢が現れている。

他方輸出相手としてプライオリティーを低く置かれているのが、日本、英國である。特に日本企業は第一期の契約時、早い時期に契約取り付けに動いていたにも関わらず、97年1月半ばに契約総額が輸出許可の限度を越えそうになった時点で、三菱が当初の契約量4万バーレルを半分に減らされた経緯を持つ。さらに第二期の輸出契約では日本、英國企業が排除されるという結果となった。これは、米国に追随して対イラク制裁解除に否定的であるとイラク政府が認識している国々に対して、圧力をかけるという意味合いを以て行われた措置であろう。

4. 制裁解除後の石油開発計画

イラクの石油輸入国に対する選別的政策が最も顕著な形で現れたのが、制裁解除後の石油開発計画の前倒し契約の締結に関してである。95年3月にイラク政府が主催した国際石油会議で、政府は初めて制裁解除後の開発計画においてプロダクショ

表4 1997年8月～12月（部分解除第二期）における石油輸出契約

企業名	国名	原油質	輸入総量 (万バレル)	輸出先
Sonatrach	アルジェリア	キルクーク	180	欧
Agip	イタリア	キルクーク	270	欧
Indian Oil Corp	インド	バスラ	671	極東
OMV	オーストリア	キルクーク	180	欧
Trafigura	オランダ	キルクーク	360	米
Addax	イス	キルクーク	180	欧
Repsol	スペイン	キルクーク	540	欧
Sirecox	スペイン	キルクーク	180	欧
Veba	ドイツ	キルクーク	180	欧
Tupras	トルコ	キルクーク	1350	欧
Delta	トルコ	キルクーク	180	欧
Total	フランス	キルクーク	612	欧
Socap	フランス	キルクーク	540	欧
S.A.M	モロッコ	キルクーク	440	欧
Alfa Eco	ロシア	バスラ	720	米
Zarubezhneft	ロシア	キルクーク	550	欧
Lukoil	ロシア	キルクーク	350	欧
Rosneft	ロシア	キルクーク	350	欧
Tatneft	ロシア	バスラ	300	米
Nafta Moskva	ロシア	バスラ	260	米
Lukoil	ロシア	バスラ	200	米
Rosneft	ロシア	バスラ	200	米
Orenburg	ロシア	バスラ	180	極東
Sidanco	ロシア	バスラ	180	南ア
Rao Mes	ロシア	バスラ	100	米
Machinoimport	ロシア	バスラ	100	米
Fortune Oil	香港	バスラ	180	極東
Sinochem	中国	キルクーク	200	欧
Coastal	米	バスラ	880	米
Mobil	米	バスラ	360	極東
Chevron	米	バスラ	360	米
Phoenix	米	バスラ	270	米
Buyoil	米	キルクーク	210	米
Coastal	米	キルクーク	200	米
Buyoil	米	バスラ	150	米

出所：MEES, 29 September, 1997